

ロールシャッハ反応と自我境界の関係

倉 本 祥 子

Relationship between Rorschach's Responses and Ego Boundary

KURAMOTO Shoko

1. は じ め に

新奇な事物に遭遇したとき、人はそれまで保っていた心の平衡状態を乱される。その影響のされ方は人によって様々であろうし、また刺激によっても異なてこよう。人が初めてロールシャッハ・テスト（以下ロ・テスト）を体験する場合も同様のことが起こる。ロールシャッハ図版のしみの模様は、あくまで意図されざる偶然の産物であって、それ以上の確定された正体を持たない素材であり、それを見る者の定義を待っている。正体を持たないけれども、何物かに見えるような気にさせる特性を備えており、見る者を誘惑する。このあいまいさのゆえに、ロールシャッハ刺激は、あたかも池に投げ入れられる小石のように、平衡状態を揺るがす契機として見る者の心に投ぜられる。被検者は、そのあいまいな素材に対し、それが何に見えるか自由に言うようにだけ教示されるのだが、それをどのように行うかの指示はなく、このテスト状況もまた、非構造的で漠然としたものである。ここで被検者に起こることは、よく見知った馴染みのある世界を離れ、未知で未確定で得体の知れない新奇な世界に踏み込む体験である。被検者は、その得体の知れないものに何とか秩序と意味を与え、順応しなければならない。その際、頼るべきヒントは、外界からは何も与えられず、被検者は自分自身の内界にその枠組みを求めるしか道はない。そうして、自らの精神内界へ手がかりを求める旅に出ることになる。

このような心的過程は、Krisの「自我による自我のための一時的部分的退行」(temporary and partial regression in the service of the ego)の現象と重なる。これは、芸術的・創造的な心的過程を、自我の統制の下に自由に無意識過程に退行し、この退行を通して体験された無意識過程を適応的に再統合するという心的過程として説明するものである。これをFreudの局所論における意識、前意識、無意識において述べるなら次のようになる。すなわち、自我の退行とは、意識過程から無意識過程への退行であり、再統合とは無意識過程の意識過程による再統合を意味する。そして、このような退行と再統合を媒介し調整するのが前意識過程である。つまり、創造的な心的過程において主役を演じるのは前意識過程なのである。この退行・再統合の過程は、健康な自律的自我においては随意的になされるものであって、退行と回復を通して、自我は無意識から生産的なエネルギーを得るのである。Schafer (1954)は、ロ・テスト状況における心的過程を、このKrisの自我による自我のための退行とみなしている。この見地からみると、ロ・

テスト過程は、前意識過程の働きに依るところが大きい心的過程といえる。被検者は、前意識に蓄えられ、普段は忘れられている記憶痕跡にアクセスし、浮かび上がってきたある記憶痕跡をインクプロットに重ね合わせ、さらに健康な自我が存在すれば、その記憶痕跡とプロットとの適合性を吟味し、最終的にプロットを既知化して、あいまい状況を克服、順応する。

被検者の主観的な体験の視点に戻ると、この、順応するまでのあいまいな状況においては、人は安定した自己の平衡感覚がなにか揺らぐのを感じる。齋藤（1988）は、このようなプロット体験の際には、自己存在そのものが一時的に同一性拡散の危険におちいるとしている。見知らぬもの、未確定の状況というのは、自己の外部、すなわち「他」の同一性が定まらないことを意味し、その中にいるとき、「他」の同一性と相補的に成立する「自」の同一性もまた定まらず混沌化するのである。そして、この一時的に自己存在の枠組みが揺り動かされる危険に耐え、そこから回復する力のありようが問題になるのである。

このような自と他の同一性の揺らぐ感覚は、自と他を分ける自我境界の在り方に係わる現象と捉えられる。本論では、主に精神分析的自我心理学の研究成果に基づきつつ、ロ・テスト体験と自我境界の関連性について探ってきたい。

2. 自 我 境 界

1) 自我境界とは

精神分析的自我心理学のいくつかある流れのうち、Freud 時代のウィーンにおいて、精神分裂病の精神病理の解明を出発点とし、病者の主観的意識の中での異常体験を理解するために、Freud の力動－構造論的な自我概念と現象学的方法との統合を試みた理論の流れが、現象－力動論的自我心理学である。この流れは Tausk, Federn, Schilder らによって生み出された。この現象学的接近法によって、自我境界（ego boundary）という概念を最初に明らかにしたのは Tausk である。Tausk (1919) は、自我境界の概念を、自と他に関する自我意識の境界を意味するものとして定義し、乳幼児の発達過程で、子どもが親とは分離した独自の自我意識を発達させるにつれ獲得されていくとした。そして、分裂病における思考伝播症状は、自我境界の退行的喪失によるものであると論じている。

自我境界の概念をより明確にしたのは、Federn である。彼は、自我備給の障害という観点から分裂病者の精神病理について解明しているが、その際に主観的意識体験の内省に基づく各種概念を用いたアプローチで、現象学的精神病理学と Freud のメタサイコロジーの理論的な統合を試みた独自の自我心理学を展開している。彼は、自我は意識の媒体であると同時に対象でもあるとして、自我に意識体験としての自我と意識の対象としての自己の両面を含めた、現象学的全体としての意味を与えている。そして、この自我の主観的経験、「心の連続的経験」を自我感情（ego feeling）と名付け、意識内容への自我感情の付与を自我化（egotization）、その撤回または排除を非自我化（de-egotization）と呼んだ。つまり、個体の意識内容は、自我感情の統一・同化作用を受ける場合には自我に所属するものとして体験され、そうでない場合は全て外界に所属するものとして経験されるのである。自我感情は自我備給が充分な状態にあるときの主体には意識されないが、備給が乱れた時意識に上ってき、前意識的な感覚といえる。この自我感情は、

精神的自我感情と身体的自我感情を含んでおり、通常両者は融合していてその二重性は気付かれない。精神的自我感情は、主体に持続感と自分固有のアイデンティティを確保させるものであるが、病的な状態では心的過程がこの精神的自我感情に帰せられなくなり、例えばヒステリー的な神経症においては心的過程は身体的な現象に変換されるし、精神病においては外部の現実投射される。身体的自我感情は、自らの身体構造に係わる身体的知覚のまとまりである。これらの自我感情は自我の核を構成し、安定した連続性を保つのである。この自我感情の個々の時点での周辺機構を形成するのが自我境界である。これは核とされるものとは違い、備給の変動によって境界が不断に揺らぐ感覚であり、表皮、辺縁の現象である。これは、静的な境界概念とは異なり、自我と非自我との間にある柔軟な力動的分割面であり、その時々での自我感情の抹消器官である。そして自我境界は、知覚刺激を自我に属するものと外界に属するものとに識別する一種の感覚器官としての機能を備えている。この自我境界の感覚、すなわち自我と非自我の境界を区別する感覚が現実感である。Federn はまた、内的精神と外的現実を分割する外的自我境界と、精神内部における外界（主としてエス）と自我を分ける内的自我境界の二種を区別している。

2) 自我境界と身体像境界

ここで、身体像境界の概念に触れねばならない。自我境界を測定する試みにおいては、しばしば自我境界を身体像——心理的経験としての身体——の境界と等価のものとし、直接的には身体像の境界の性質を測定してそれを自我境界の象徴とみなす立場をとっている。自我境界と身体像境界の関係は、そもそも自我と身体の関係に由来する。その根底には、あらゆる心的なものは身体的体験に絶えず依拠しつつ発展していくという精神分析の基本的原則が見て取れる。Freud は『自我とエス』（1923）において、自我を、精神構造を外部と接触させ、情報の受容と伝達を行うという役割を果たす心的外被として位置付け、その心的外被は身体的外被の体験から生じてくるとしている。そして、自我はまず第一に身体的自我であり、究極的には身体的な感覚、主として身体の表面に由来する感覚から生まれてくるものであると結論している。Fisher と Cleveland (1958) は、身体像境界を、身体周辺に投影される態度と期待の体系の表象であると述べ、自我境界とほとんど置き換えられる概念として用いたことがある。Landis (1970) は、身体像と自我が同一であることは稀であるが、前者は後者の中心的部分であり、それを象徴するものであろう、としている。そして身体像境界と自我境界という二つの概念の関係について、第一に原則として身体像境界という概念が含む心理的領分は自我境界のそれより狭いということ、第二に身体像は自我よりも特異的・直接的に運動感覚及び触覚からの経験によって影響を受けるであろうということを述べている。Kreuger (1990) は、身体感覚、身体機能、身体像の心的経験の組み合わせたものを身体自己と呼び、次のように述べている。すなわち、身体自己と心理的自己の発達とはパラレルであり、発達の、精神力動的文脈において、身体像と身体境界の一貫性は自我境界のまとまりへと連続していく、という。

これらの議論を概観してみると、自我境界と身体像境界は密着不可分の関係にあり、そこには、身体というものが無視できざるものとして存在していることが分かる。そこで、ロ・テスト体験と自我境界の関係を探るにあたっては、ロ・テスト体験における身体性が重要な手がかりとして着目されるべきであろう。

3. 身体像境界得点

Fisher と Cleveland (1958) は、ロ・テストを用いて身体像境界の在り方を捉える身体像境界得点 (Body Image Boundary Score) を考案した。彼らは、リウマチ患者が、表面が防護的な特質を持つようなロールシャッハ反応を出すことに気付いた。これを、リウマチ患者は、このような反応の中に自分の身体周辺は固くて防護的な壁であって、それが特殊な防壁になっているという感情を投影していると解釈し、このことから、人が身体像境界を経験する仕方が、ロールシャッハ反応の境界的属性に反映されるであろうという仮説を導き出した。続く心身症のロ・テスト研究においては、症状のある身体部位と身体像境界の関連性を検討し、身体表面に症状のある人 (リウマチ、神経性皮膚炎など) は、自分の身体を防護壁で囲まれていると考え、逆に、身体内部に症状のある人 (大腸炎、胃の障害など) は、自分の身体を浸透されやすいものと考えるであろうと仮定した。そこで、この身体像境界を測定するために、ロ・テストを用いた二つのカテゴリーを持つ評定法が考案された。それは、ロ・テスト反応の境界的側面に関して、明確で堅固な防壁的な性質を持つものに「障壁性得点」(barrier score, 以下BS) を、脆弱で浸透的、曖昧な性質を持つものに「浸透性得点」(penetration score, 以下PS) を与える採点方式である。これにより彼らの仮説は支持された。以降、様々な研究者によってこの採点法は採用され、ロ・テスト反応に表れる境界的側面の属性と、それを知覚する人の境界の属性との間には、構造的・機能的な類似があることを示す研究が積み重ねられてきている。そして、身体像境界、自我境界は、この二つの身体像境界得点によって、鮮明で堅固であるとか、脆弱で容易に浸透されるというように記述されてきた。我が国では、木場ら (1980) が Fisher と Cleveland に準拠した採点基準を作成している。

この評定法の指標は、臨床的・経験的に収集されたロ・テスト反応における反応内容の分類である。被検者によって見られた境界的性質を持つものを、それが被検者の身体像境界を象徴的に表しているとする見方に基づいている。ここで、ロ・テストでは、被検者が「何を見たか」ということよりも、図版を「どのように見たか」という体験的特性の方が、人格特性を知る上で重要であると考えられ、反応内容の一般的・象徴的解釈はあまり重視されないことを考えると、身体像境界得点によって評定されるものが、果たして被検者の身体像境界の在り方を正確に反映するものかどうか、検討しなおす必要を感じる。この疑問に対しては、身体像境界得点をロ・テストの決定因などの他の指標に照らして、その意味するところを問い直す研究がいくつかなされてきている。(小出・馬場 1978, 吉川 1990, 青柳 1991など) しかし、それらの研究も、身体像境界得点をBS, PSの二分類に分けて検討しているだけであり、筆者としてはさらにこれら二得点の下位指標にまで立ち入って、その意味するところを明らかにし、場合によっては新たな指標の編成を検討せねばならないのではないかと考えている。

4. ロ・テストの体験的特性からの検討

次に、ロ・テストの体験過程そのものに視点を移して検討する。

1) 図版のもつ身体性

まず、インクブロットの構造について検討しよう。インクブロットは、それを見る人の深い層に影響を及ぼすものであるためには、絵画的性質を持っていなければならない。Rorschach の考えによれば、その必須の要件は、まず比較的単純であること、それから、図版内のしみの布置が対称性を中心とする空間的リズムを生むような条件を備えていなければならないということである。もしも、あまりに複雑であったり、何らの空間的リズムも持たないブロットであったなら、見る者は混乱した錯雑な印象に圧倒されてしまったり、あるいは“ただのインクのしみ”として片付けてしまうことになるだろう。特に、この後者の特性によって見る者はブロットに引き寄せられ、そこに何らかの意味あるものが見出せそうな感じを抱くものと思われる。

Schachtel (1966) は、図版の対称性は、ブロットとの無意識的な同一視を可能にすると考えた。中央軸の存在とその両側が対称であることが、特に脊椎動物の骨格、器官の形との類似性を思わせるからというのがその理由である。実際、多くの被検者が中央軸に背骨を見たり、両側の部分に対称性に基づく臓器などの身体部位を見たりする。そこまではっきりとはしていなくても、この構造特性ゆえに多くの被検者が知らず知らずのうちにブロットを自分の体と同一視することは、中央軸そのものの認知や、両側の部分との関係における知覚の仕方から推測しうる。この同一化の機制により、被検者は、ブロットを、それに順応すべき外的刺激としてあくまで対象化して捉えることから、自分の身体感覚、自己感覚をそこに投影して、ブロットを自分自身あるいは自分の一部として体験するようになる。そこでは、自分と図版との境界があいまいになり、外界の事物と自己の精神内界が混じり合うというような、自我境界が揺らぐ現象が起きている。図版の対称性のみが被検者の同一視を促す唯一の要因ではないだろうが、これは、図版のもつ身体性について言及している点で、注目に値する。

ブロットにおける色彩や濃淡も、見るものの身体感覚に訴えるインパクトをしばしば持つ。色の知覚には、しばしば、感情をかきたてるとか、沈める、しっくりする、しっくりしない、生き生きしている、物静か、温かい、冷たい、快い、汚い、おいしそう、芳しいなどといった情調や気分が随伴する。これらの感じは、通常、嗅覚・味覚・触覚などの身体的感覚に伴う快・不快感であるのだが、色という刺激は視覚的認知を通して、これら身体感覚を呼び覚まし、さらにそれに伴う情緒体験を引き起こす作用をもつのである。このように、色彩刺激は、外的自我境界を貫通してその内部に侵入してき、さらにそのインパクトによって内的自我境界を揺るがせ、エスに由来する様々な感情・情動をわきあがらせるという効果を持つのである。この強烈な刺激価のゆえに、しばしば色彩ショックと呼ばれる現象が起き、そのパーソナリティ力動の重要性は諸家によって指摘されるところである。

濃淡の刺激価については、Klopper が、基本的な情緒的安定の欲求を喚起するような、ある種の接触感覚をもたらすものである、という見方を示している。濃淡の知覚は、柔らかそうな、固そうな、ごつごつした、でこぼこした、つるつるしたなどといった材質の接触感覚を喚起することがあるが、それは色彩知覚に伴う身体感覚や情緒体験ほどしばしば起こるものではない。このような知覚表象が体験されるには、濃淡によって印象を受けるだけの特別な感受性や傾向があることが前提となる。それはいわば、自己の内面の微妙な感情体験に対する感受性といえるものである。このような感受性によって捉えられた濃淡反応は、人が自分の愛情欲求、情緒的接触の欲

求をどう認知し、処理するかを示す。このような濃淡刺激の知覚は、自我境界を貫通してもたられられるようなものではなく、むしろ自我境界にそっと触れてき、その微妙な刺激がいかに感知され処理されるかということが問題になってくるのである。

以上、図版全体をおおまかにみた特性についてみてきたが、個々の図版をさらに詳細に検討すれば、様々な次元での身体的な刺激価が見出されるであろう。

2) 運動反応

もともとプロットは静止したものであり、そこには運動の要素は存在しない。その、所与ではない性質をそこに見る現象である運動反応の体験は、他の所与の要素に基づく反応とは異なる力動に基づくと考えられる。

Rorschach の運動反応の説明では、単に姿勢・運動が述べられているというだけでなく、被検者自身が内的に“運動の感じ”を味わっていることが肝要であるとしている。運動反応は、一般的には人間の姿か、人間様の姿勢・運動をする動物がみられる時に、そこに被検者自身のある筋肉運動感覚が喚起・付与されていることが見て取れなければならない。無生物が見られる場合も同様である。実際には静止しているプロットを見て、ある運動をそこに感じるという心の動きについて、Schachtel (1966) は人間運動反応に焦点をしばって次のように分析している。反応を決定する際に、被検者は静止しているプロットを客観的に観察する態度にとどまらずに、そこに見出した人物像が、いかにして動き、あるいはいかにしてそのような姿勢をとっているのかを、その人物と同じ立場にたって、その筋肉運動感覚を自分の内に主観的に体験するのである。それは、おおまかには視覚的認知体験の一部なのであるが、その認知に含まれている筋肉運動的な要素は、自分自身の身体の中に生じる運動感覚、ないしは運動衝動感覚であり、そこでの自分の身体の認知は、必然的に対象であるプロットの認知と融合している。このことは、運動選手やダンサーの動きを見て、あたかも自分がプレーしているかのような融即感を味わう体験と類似しており、両者は、主に投射の機制に基づく共感の行為というふうに括れる。実際の運動を見る場合には、筋肉運動感覚に伴って、臨場感やそのプレーに伴う緊張感や興奮、快不快などといった主体的な感情を抱くほどの強烈な主観的体験となる。ロールシャッハ図版を見る際にも、あまりにも強烈で深い主観的確信の感情に支えられて、被検者内のあるものが、対象に生じていると信じるものに同一化するような運動反応が生じることもある。その時被検者は、自分が“単なるインクのみ”を観察しているのだという事実を忘れてしまっているかのように見え、わき起こってくる主観的体験に没頭し圧倒されている。このような、いわば妄想的で図版との距離を保てなくなっているような反応については、後述する。

このような、運動や感情の共感の行為は「投射」の機制に基づいている。Schachtel の用いる投射の意味は、“自分の属性、特性、感情、態度、欲求などを、周囲の人や事物に帰する心的メカニズム”ということであり、本人が投射される内容が自分の内にあると知っている場合も知らない場合もあるが、投射の過程そのものは知らないうちに生じるのである。すなわち、認知する事物によって喚起された、その人自身の筋肉運動その他の感覚や感情は、認知された対象に投射され、本人が気付かないままに、共感的に認知された対象の像と完全に融合するのである。このような、内界を外界に帰する心的過程では、自我境界の拡張が起こっている。

5. 自我境界の異常を示す反応

次にみるのは、自我境界にかなりの変化が生じていると考えられるようなテスト現象についてであり、主に小此木・馬場（1985）の見解に依りながら、検討していく。先述のように、Federnの自我心理学では、自我境界とは、自我化された意識内容と非自我化されたそれとの境界であるのだが、それは現実感として主観的に体験される。現実感とは主観的な感覚であって、必ずしも客観的な現実とは一致しない。自我境界に自我のエネルギーが充分に向けられていれば、外的事象は本人にとって生き生きとした現実として、すなわち現実感をもったものとして感じられる。そして、正常な自我の場合はさらに、現実感をもって捉えられた意識内容が、客観的現実と一致するかどうかについて現実検討が行われる。もしも、自我境界の備給に変化が生じれば、本人が感じる現実感も異なったものになる。

もしも自我境界が脆弱化すれば、外界と自己との区別や、空想と現実、投影する主体である自己と投影によって生み出されたものとの区別があいまいになってしまう。ロ・テスト反応では、「大きな蛾がいまにも襲いかかってきそうだ」「この人は私に敵意を持っている」「この目がじっとこちらをにらんでいる」といったものがそうである。この場合、プロットを生きた動物や人間と決めつけているという点で、空想と現実との境界に障害がみられるし、また、それらのものが自分に対して感情や行動を向けてくると思い込んでいるという点で、外界（この場合は投影によってつくり出された非現実的外界）と自己との境界の障害がある。このように妄想的な投影がなされる反応は、自我機能全体の病態化が進行した状態で生じてくる。

それほどには自我境界の弱体化が深刻でないものとしては、「二人がダンスしている。その音楽が聞こえてくるようだ」「南国の大きな花。強烈な香りを感じる」「黒いのは死の影が揺らめいているようで不吉だ」「この赤がほとぼしっているようで、見ていて気分が悪くなる」といった反応がある。これらにおいては、被検者自身の主観や感覚（音、香り、気分）がプロットそのものの特性、つまり現実であるかのように扱われ、両者の区別が判然としなくなっている。

これらは、自我境界そのものは保たれているが、それに対する備給が不全になって、弱化したものである。被検者は自分とプロットとを、それと自覚のないままに関係づけ、そこに見られたものに強い情緒的な結びつきを感じている。つまり、投影過剰な反応がなされているのである。備給が正常であれば、自我境界の内側にある感覚、感情、気分などが活性化されても、それらの主観はあくまで自分の内的現実であって外的現実とは区別されるというこが自覚される。

これに対して、自我障害が進行した状態では、自我境界そのものが不明確になり、外界と自己とが融合し、融合していること自体を本人が自覚しえないという状況が生じてくる。これを示唆するのが、「みずたまり」「雲みたいなもの」「えのぐのしみ」といった、輪郭線がぼやけ、漠然とした印象しか捉えられず、表象としても空虚で無力な、あいまい反応（vague response）である。

以上の現象とは逆に、自我境界が硬化して、その内側にあるものと外界との交流が絶たれていることを示すような、いわば投影過少な反応がある。たとえば「これが頭で、その下に胴のようなもの、足のようなものがあるから合わせると生き物の形になる。ここから出ているのは位置からいって手ということになる。足は人間のようなだが、顔は尖っていて鳥のようだ」という表現で

人間のようなものを見た場合、各部分を正確に認識するという現実検討力は保たれているが、それらの総和を見た瞬間に「人間のようなもの」と捉える直感的認識力に欠けている。この直感的認識を促すのが自我境界のエネルギー備給であり、それを支えるのが感情や感覚（エスに根ざすもの）であるのだが、自我境界の内側にある感情や感覚といったものを守る防衛があまりに強く、自我のエネルギーが防衛活動に取られてしまうと、そうした感情や感覚が自我境界の中に閉ざされて、外界からの刺激に反応しなくなる結果、このような現象が生じるのである。

以上のようなテスト現象は、被検者の言語表現のみならず、その態度、表情、口調などを観察し、さらにプロトコル全体から知りうる人格の力動を考慮して、反応を吟味することで見出せるであろう。

6. お わ り に

以上、ロ・テスト反応を、自我境界の在り方とその体験に関連づける視点をいくつか示した。中には、身体像境界得点のように明確な指標として体系化されているものもあるが、大部分は、ロ・テスト過程の複雑な心的力動の中に、その微妙な意味あいを含み持つものである。それは、基本的には、個々の事例において、時にはテスト反応以外の資料も鑑みられつつ、読み解いていけるべきものであろう。

文 献

- アンジュー D. 福田素子（訳）『皮膚－自我』言叢社 1993 (Anzieu, D. 1985 *Le Moi-peau*. Paris : Bordas.)
- 青柳寛之 1993 身体像境界の二側面と自我機能 「境界」型の類別化による検討 ロールシャッハ研究XXXV, 109-121,
- Bellak, L. & Hurvich, M. & Gediman, H. 1973 *Ego Function in Schizophrenics, Neurotics, Normals*. N. Y. : Wiley.
- Federn, P. 1952 *Ego Psychology and the Psychoses*. New York : Basic Books.
- Fisher, S. & Cleveland, S. E. 1958 *Body Image and Personality*. Princeton : Nostrand.
- フロイト S. 小此木啓吾（訳）自我とエス フロイト著作集 6 人文書院 1970 (Freud, S. 1923 *Das Ich und das Es*.)
- 河合隼雄 1969 臨床場面におけるロールシャッハ法 岩崎学術出版
- 木場清子・木場深志 1980 ロールシャッハ身体像境界得点についての基礎的研究（第1報） ロールシャッハ研究XVII, 33-51.
- 小出れい子・馬場礼子 1978 身体像境界得点に関する研究——決定因との相関をめぐって—— ロールシャッハ研究XX, 25-39.
- クロッパ B. & デイビッドソン H. H. 河合隼雄（訳）『ロールシャッハ・テクニック入門』ダイヤモンド社 1964 (Klopfer, B. & Davidson, H. H. 1962 *The Rorschach Technique — An Introductory Manual —*. New York : Harcourt, Brace & World.)
- Klopfer, B. et al. 1954 *Developments in the Rorschach Technique I*. New York : World Book Co.
- クリス, E. 馬場礼子（抄訳）芸術の精神分析的解明 精神分析研究 Vol. VII No. 1 ~ No. 3 (Kris, E. 1952 *Psychoanalytic Explorations in Art*. International Univ. Press)
- Krueger, D. W. 1990 *Developmental and Psychodynamic Perspectives on Body-Image*

倉本：ロールシャッハ反応と自我境界の関係

- Change. Cash, T. F. & Pruzinsky, T. (Ed.). BODY IMAGES. N. Y., London. : The Guilford Press
- 倉本祥子 1995 自我境界に関する一研究——意識水準及び投影水準からの検討—— 京都大学教育学研究科 平成7年度提出修士論文
- ランディス, B. 小出れい子 (訳)『自我境界』岩崎学術出版 1981 (Landis, B. 1970 Ego Boundaries. Int. Univ. Press.)
- 小此木啓吾 1985 現代精神分析の基礎理論 弘文堂
- 小此木啓吾・馬場礼子 1972 精神力動論 医学書院
- ロールシャッハ H. 東京ロールシャッハ研究会 (訳)『精神診断学』牧書店 1964 (Rorshach, H. Psychodiagnostics. (英語版) Berne : Hans Huber, 1942)
- 齋藤久美子 1988 インクプロットの色彩効果『臨床的知の探究』上巻 創元社
- 齋藤久美子 1988 ロールシャッハ反応と脱カオス『臨床的知の探究』下巻 創元社
- 齋藤久美子 1990 自我とパーソナリティ理解 小川・詫摩・三好 (編)臨床心理学大系2 パーソナリティ 金子書房
- シャハテル E. G. 空井健三・上芝功博 (訳)『ロールシャッハ・テストの体験的基礎』みすず書房 1975 (Schachtel, E. G. 1966 Experiential Foundations of Rorschach's Test. New York : Basic Books.)
- Schafer, R. 1954 Psychoanalytic Interpretation in Rorschach Testing — Theory and Application —. N. Y. : Grune & Stratton.
- Tausk, V. 1919 On the Origine of the "Influencing Machine" in Schizophrenia In: The Psychoanalytic Reader (ed. by Fliess, R.). New York : Int. Univ. Press. 1948
- 吉川史津 1990 ロールシャッハ身体像境界得点に関する一考察 Barrier Score と Penetration Score の相互関係を中心として ロールシャッハ研究XXVII, 87-100.
- (博士後期課程2回生, 臨床人格心理学講座)